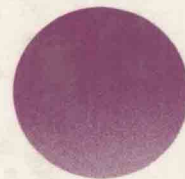
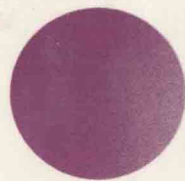
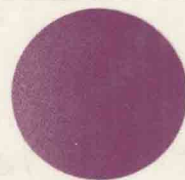

国際貿易の理論

池間 誠 著



ダイヤモンド社

国際貿易の理論

池間 誠 著

ダイヤモンド社

著者略歴

いけ まこと
池 間 誠

1941年 沖縄県宮古島に生まれる。

1964年 商学士 (小樽商科大学)。

1966年 経済学修士 (一橋大学)。

1971年 Ph. D. (Australian
National University)

現在 一橋大学経済学部助教授。

主要論文 'Import Dependence in
the Australian Economy,' (Ph.
D. 論文, 1970), 'The Effects of
Economic Growth on the De-
mand for Imports: A Simple
Diagram,' *Oxford Economic
Papers* (March 1969), 'On the
Factor-Price Frontier in the
Pure Theory of International
Trade,' *Hitotsubashi Journal of
Economics* (February 1978),
その他。

国際貿易の理論

昭和54年5月24日 初版発行

¥ 1800

著 者 池 間 誠

© 1979 Makoto Ikema

発行所 ダイヤモンド社

郵便番号 100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集 電話 東京 (504) 6403
販売 電話 東京 (504) 6517
振替 口座 東京 9-25976

編集担当/小黒通顕

落丁・乱丁本はお取替えいたします

信毎書籍印刷・山田製本
3033-280910-4405

は し が き

石油危機とか円高とかで周知のように、現代の経済にあっては、国際経済上の諸問題はわれわれの日常生活に直接かかわっており、その影響の度合いもますます強く深くなっている。そのような相互依存の国際経済に内包される問題は複雑多岐で広範にまたがっている。その中のごく一部の基本的側面を、経済理論的に理解するための入門的概説を、しかも特定のフレームワークの中で試みようというのが本書の課題である。

本書の主眼は自分で考えるように仕向けることにあり、この目的の達成にとっては、特定のフレームワークの中で純粋性をかたくなに守ることが必要だ、と私は思う。実際、そのような純粋性ないし首尾一貫性という視点から、一橋大学の小平（1, 2年生）と国立（3, 4年生と大学院生）での講義ノートを整理したのが、本書である。

フレームワークがどのように特定化されているかについては第1章に述べられている。ここでは、自分で考えるように仕向けることを主眼にした結果、従来の多くの教科書と比べて、どのような点に本書のアプローチの特色ないし相違点があるかを述べておきたい。少なくとも五つの点が指摘できる。第一点は、モデルを寄せ集め、知識を切り売りするのではなく、段階的にモデルを展開せしめ、その操作を通して問題の理解を深めることに重点がおかれていることである。そのため、国際貿易理論の中核をなす「比較優位の理論」の出番は第7章まで待たなければならない。「比較優位の理論」から直ちに説き起こすのが通常であるが、そのために国際貿易理論の入口で多くの人々が躊躇し、立ち去ってしまう恐れなしとしない。そのような危惧は本書では軽減されているものと思う。これが第二の相違点である。

第三点は、本書は一般均衡分析の枠内にとどまりながらも、なおかつ部分

均衡分析のもつ簡明さも保っていることである。第四点は、オッファー曲線にしろ、したがってまた交易条件にしろ、いささかの曖昧さも残さず、すべてが究極的な基礎的パラメーター（需要状態、生産技術、そして生産資源賦存量）によって表現されていることである。最後に、第五点として、常套的手段である「社会消費無差別曲線」は、最後の第10章を除けば、表立っては使用されていない。

以上の特色ないし相違点は、もちろん本書の長所でもあるが、それらは同時に短所となり限界ともなる危険性をはらんでいることも否定できない。素直な従順さとしたたかな批判精神で本書の長所が伸ばされ、短所が克服されることを望むとともに、読者諸氏のご叱正をいただくべくお願いしたい。

私を国際経済学の分野にいざない、着実性に重きをおいて指導されてきた小樽商科大学教授麻田二郎先生、そして職業としての学問の厳しさと大胆で自由奔放な独創性の重要性とを私に教えてくださった一橋大学教授小島清先生が、共に、来る申年に還暦を迎えられる。それぞれの勉学の段階で優れたお二人の師に恵まれたことは身に余る幸せであり、この小冊を両先生に捧げることをお許しいただきたい。

本書の第8章以降の各章は、国際経済研究会での報告にもとづいている。貴重なコメントを与えられた一橋大学山沢逸平教授、中央大学唐沢延行助教授、明治学院大学国本和孝助教授をはじめとするメンバーの方々には、日ごろの学問的刺激も含めて、ここに感謝の意を表したい。また草稿に目を通し貴重なコメントを寄せられた一橋大学大学院生佐竹正夫氏（現在、小樽商科大学専任講師）に心からお礼を申しあげるしだいである。

1979年立春

池 間 誠

目 次

はしがき

第1章 序 論

1.1 本書の課題.....	3
1.2 本書の構成.....	5
1.3 参考文献	8

第2章 最も単純なモデル

2.1 はじめに	11
2.2 消費支出パターン.....	12
2.3 オフファー曲線	17
2.4 貿易の均衡.....	21
2.5 均衡交易条件の決定因	27
2.6 要 約	30

第3章 均衡化機構

3.1 はじめに	31
3.2 貿易の不均衡	31
3.3 価格調整	34
3.4 為替レート調整	37
3.5 数量調整	40
3.6 要 約	44

第4章 支出政策

4.1 はじめに	45
4.2 支出政策	46
4.3 輸入性向の役割	50
4.4 最終的調整——交易条件変化	54
4.5 要 約	57

第5章 関 税

5.1 はじめに	59
5.2 関税と交易条件	59
5.3 両国共に関税を賦課する場合	68
5.4 関税と輸出課税	72
5.5 要 約	75

第6章 経済成長およびトランスファー問題

6.1 はじめに	77
6.2 経済成長と交易条件	77
6.3 トランスファー問題	83
6.4 要 約	90

第7章 単純なモデル

7.1 はじめに	91
7.2 単純なモデル	92
7.3 貿易の決定因	97
7.4 貿易の均衡	102
7.5 一つの応用——関税	108
7.6 要 約	112

目 次

第8章 特化パターンと貿易利益

8.1 はじめに	115
8.2 リカード＝ミル・モデル	116
8.3 両国完全特化	124
8.4 一国完全特化	132
8.5 要 約	136

第9章 貿易利益再説

9.1 はじめに	139
9.2 消費利益と特化利益	139
9.3 特化の負担——交易条件効果	145
9.4 要 約	152

第10章 貿易利益の国際間分配

10.1 はじめに	155
10.2 比較静学	155
10.3 若干の準備——ミルの効用関数	163
10.4 貿易利益の国際間分配	168
10.5 要 約	173

付録 J.S.ミルの国際価値法則の検討

A.1 はじめに	175
A.2 J.S.ミルの展開	176
A.3 J.S.チップマンのミル解釈	181
A.4 要 約	185
索 引	187

国際貿易の理論

第1章 序 論

1.1 本書の課題

日本が自動車や電気製品などを輸出し、鉄鉱石や繊維品などを輸入するのはなぜであろうか。もっと一般的に言えば、日本と外国の間で貿易が行われるのは、どうしてであろうか。また、各国の輸出量や輸入量は、どのような水準に決まるのであろうか。さらに、日本と外国の間で輸出額と輸入額が一致しないという貿易収支の不均衡が生ずる原因は何であり、それはどのような形で是正されるのであろうか。貿易が行われるのは、それが各国に利益をもたらすからといわれるが、そのような貿易利益の中身はいったい何であろうか。

諸国間の経済取引を分析対象とする国際貿易理論において、以上の諸問題は、そのごくわずかな領域を占めるにすぎないが、しかし優れて基本的な問題である。本書で私が試みたいことは、このような基本的な問題を、できるだけ単純で素朴な経済を想定して、理論的に明解に説明することにある。現実の、実際に躍動してやまぬ国際貿易を直接に分析せずに、なぜ「単純で素朴な経済」を想定するのか。なぜ「経済模型(モデル)」を設定する必要があるのか。海図なしに東京からシドニーに向けて航海することは至難の業である。また、東京から大阪まで自動車で行くには、道路地図があったほうが便利で時間の節約になるばかりでなく、安全でもある。これと同じように、怒濤さかまき、錯綜する経済を理解するにあたって、種々雑多な諸要素の中から重要なもの、本質的なものを抽出し、それらの間の基本的な関係を整理し究明する必要がある。モデルの必要性の根拠はそこにある。

「現実の経済では云々」とか「経済の事実を見るに云々」とかいうことをよく耳にする。だが「現実」とか「事実」とかいわれるものは何であろうか。

怒濤さかまく大洋もあれば、あくまで静かな大洋もある。同じ異国で暮らしても時と所で日本人に対する態度は違ってくる。それらのいずれが「現実」であり、「事実」なのか。私にはわからない。いうところの「現実」とか「事実」とかは、個々人の具体的体験に強く依存している。そのような「実感」を昇華せしめ、個々人に共通するもの、本質的なものの次元で考えるために、何らかのモデルを設定する必要がある。

では、どのような経済を想定するのか。本書においては、消費面では一貫して一つの型が仮定される。すなわち、各財への支出額が所得（支出）額に占める割合は常に一定であると仮定する。生産面に関しては、三つの代替的ないしは段階的仮定が採用される。第一の仮定は、各国はそれぞれ異なる種類の一つの財だけを生産するということである。第二の仮定は、各国は共に同じ二種類の財を生産するが、各国における各財生産量は一定であるというものである。最後の第三の仮定は、各国共に二種類の財を生産し、かつ両財産間での一定率での生産転換を認めるものである。

消費面にしろ生産面にしろ、本書で採用される仮定は、以上のように、かなり単純であり素朴である。しかし、このことはこれらの仮定が特殊で非現実的であることを必ずしも意味しない。まず、支出割合一定という仮定が生産面に関する第一の仮定と結合される場合には、次のことを意味する。すなわち、各国において国内財または輸入財に対する支出額が国民総支出額に占める割合が一定であるということである。もっと具体的にいえば、例えば、日本の総支出額に対する輸入額の比率（輸入依存度）が一定ということである。一国の輸入依存度は、周知のように、その国の経済発展の段階に応じて変化する。とはいうものの、数年の間に急激に高くなったり低くなったりはしない。特に経済がある段階まで発展し、産業構造が比較的安定している時期においては、輸入依存度もだいたい安定的である。その意味で、一財生産ケースにおける各財への支出割合一定という仮定は、それほど特殊なものではない。

とまれ、仮定に対する現実妥当性を云々することは、この段階ではあまり

第1章 序 論

生産的ではない。該当する章や節で再び言及するであろう。いずれにしろ、微に入り細にわたった道路地図は、特に遠距離のドライブにあっては、むしろ役に立たない。高速道路その他の主要なものが示されていれば十分である。上述の諸仮定に立脚する本書の経済模型もそのようなものだと理解していただければよい。これらの仮定のために、国際貿易理論における基本的な問題に対して、本書では簡単な手続によって明確な結論を得るであろう。微細な一般的模型にもとづいて曖昧模糊とした雰囲気の中に身をおくことは、できるだけ避けたいと思う。もちろん、本書で導出される結論自体については留保条件が必要なことを、われわれは忘れてはならない。

1.2 本書の構成

本書の構成は、以下のとおりである。次の第2章で「最も単純なモデル」が展開される。それは2国2財だが、各国は一つの財のみを生産するというモデルである。この財は各国の国民生産物とみなされるから、このモデルは「集計化されたモデル」と考えてよい。第2章では、特に、本書全体を通して採用される消費支出パターンに関する仮定の特徴が吟味される。また自国と外国の経済がどのように結びつけられるか、貿易の均衡とは何かなどについて説明される。その意味で第2章は本書の基礎的な章であり、それが十分に理解されるならば、後続の諸章の理解も容易である。

第3章から第6章までは、第2章の応用編である。第3章では国際貿易を均衡化させる機構について説明する。第4章では総支出額と総所得額との乖離が貿易収支の不均衡をもたらすことを簡単に説明する。以上の諸章においては貿易を阻害する要因は考慮外におかれたが、第5章において貿易障壁の一つである関税が導入される。関税が交易条件に与える効果、したがってまた貿易利益に対する影響はどうか、さらに両国が共に関税を賦課するとどうなるかという問題がとりあげられる。第6章では、これまで所与とされた生産資源量が増加したり、あるいは生産技術が改善された場合、すなわち経済

が成長したときに交易条件はどのように変化するかを説明する。この章では、また、一国から他国に所得が移転されたとき、それが貿易の均衡にいかなる影響を及ぼすかが考察される。

以上の諸章は第2章の集計モデルに立脚している。第7章では、これまでの各国1財生産から、各国2財生産という非集計化が行われる。ただし各財の生産量は、相対価格のいかんにかかわらず、常に一定であると仮定される。そこで明らかにされることは、両国の間で貿易が行われるための原因ないし条件は何かという点である。第7章のモデルにもとづいて、上の第3章から第6章まで取り扱った事柄を分析することができる。言い換えれば、第7章から出発してもよかったのである。しかし、そうした場合には、第7章の関税への応用例からもわかるように、われわれは同じことを理解するのにもっと多くの努力を要することになったであろう。

第8章では、第7章の生産面の仮定が緩められる。すなわち、財の相対価格の変化に対応して両財の生産量も変化する。ただし、ある財1単位を犠牲にして生産される他の財の量は常に一定であると仮定される。これは不変生産費のケースであり、単一の生産資源という仮定と相まって、リカード型の生産可能セットを与える。需要に関しては相変わらず支出性向一定を仮定しているが、この仮定は J. S. ミルによっても使用されたので、「ミルの仮定」とも呼ばれる。このような意味で、第8章はリカード＝ミル・モデルの展開である。

第8章のモデルで明らかにされることは、上述の二つのモデルとは違って、貿易が各国の生産量の組合せを変化せしめ、それぞれが輸出財の生産に特化するということである。どの国がどの財に特化するかは、生産技術の相対的な差異によって決まる。さらに、特化パターンと貿易利益との関係が、第8章で明らかにされる。ここで得られる結論は、貿易は各国に利益をもたらすことはあっても損失はもたらさないということであり、また貿易利益とは輸入財消費量の増加として把握されるということである。

第9章に移ると、第7章と第8章で展開された二つのモデルが、貿易利益

第1章 序 論

という視点から比較検討される。交易条件効果を考慮したときには、貿易前後ではなく、特化前後において、厚生水準の低下する可能性があることが指摘される。

第10章は再び第8章でのリカード＝ミル・モデルに戻って論が進められる。ここでは、各種パラメーターの変化が交易条件に与える影響が吟味される。その後、「ミルの仮定」の背後にある効用関数について言及され、それにもとづいて、貿易の結果、どの国がいっそう厚生水準を高めるかを明らかにする。その過程で、一国の厚生水準の変化が、交易条件と正の相関関係にあることが厳密に定式化されるであろう。

以上の諸章に加えて、付録では「J. S. ミルの国際価値法則」を検討する。この法則は、実は、第8章で展開したものにはかならない。付録でわれわれはミル自身の若干の混乱ないし曖昧さを指摘するであろう。と同時に、ミルの国際価値法則の再評価を訴えている J. S. チップマンの主張を批判的に検討する。われわれはチップマンのミル評価に組するものの、彼のミル解釈は狭きにすぎ、また論証にも誤りの多いことを指摘するであろう。

以上が本書の構成である。分析上で用いられる数学はきわめて初歩的な代数であり、主として図にもとづいて説明が進められる。本書で展開されるモデルのいずれにあっても、基礎的パラメーターは、両国の支出性向、生産資源投入係数、そして生産資源賦存量である。われわれの導出する結論は、常に、これらのパラメーターによって表現されることに注意を喚起しておきたい。またモデルの枠組は一般均衡であることにも留意されたい。

最後に、以上からもわかるように、本書はさまざまな代替的モデルを寄せ集めたものではけっしてない。ある章ではあるモデルを、他の章では別のモデルを採用することには、それなりのメリットもあろう。しかし、本書ではモデルは段階的に複雑になっていくだけである。このような展開を通して、論理の筋道を追跡し、国際貿易理論を理解するための大筋を身につけていただけるなら、本書の役割は十分に果たされたといえよう。

1.3 参 考 文 献

本書は国際貿易理論への入門的性格を備えているが、特定の諸仮定にもとづいて議論が展開されている。したがって、もっと広い視点からさまざまな問題を取り扱った書物も併せて読まれるのがよいであろう。以下に基本的な文献をあげておく。

まず本書を書くときに念頭においたのは、

- (1) Pearce, I. F., *International Trade* (London : Macmillan, 1970), Book I
- (2) Caves, R. E. and Ronald W. Jones, *World Trade and Payments* (Boston : Little, Brown and Company, 1973)

である。特に(1)は本書の第2章から第6章に対応しており、第7章は(2)の第1部に相当している。なお、(2)の第2版が1977年に出版された。また、

- (3) Heller, H. R., *International Trade — Theory and Empirical Evidence* (New Jersey : Prentice-Hall Inc. 1968) [木村・村上訳『国際貿易論』(東京：ダイヤモンド社、昭和45年)]

も手ごろであり参考になろう。

邦文の文献は豊富である。その中から若干を選ぶのは至難であるが、

- (4) 小島清『外国貿易(四訂)』(東京：春秋社、昭和48年)
 - (5) 小宮隆太郎・天野明弘『国際経済学』(東京：岩波書店、昭和47年)
- をあげておきたい。

本書の第8章のリカード＝ミル・モデルは二国二財にとどまっているが、それを二国多数財に拡張したものとして、

- (6) Dornbusch, R.E., S. Fischer, and P. A. Samuelson, "Comparative Advantage, Trade and Payments, in a Ricardian Model with a Continuum of Goods," *American Economic Review*, vol. 67, no. 5

(December 1977)

がある。興味のある方はぜひ通読して欲しい。

最近、不確実性下の貿易理論が展開されている。その場合に主として用いられる生産可能セットはリカード型である。例えば、

(7) Tarnovsky, S. J., "Technological and Price Uncertainty in a Ricardian Model of International Trade," *Review of Economic Studies*, vol. XLI (2), no. 126 (April 1974).

(8) Kemp, M. C., *Three Topics in the Theory of International Trade ; Distribution, Welfare and Uncertainty* (North-Holland Publishing Company, 1976), part III.

本書では不確実性下の貿易はとりあげなかったけれども、われわれの第8章のモデルによって、それを分析することは可能である。そして現在のところ、不確実性下の貿易理論は、比較静学の枠内にとどまっているように思われる。今後研究されるべき分野である。